

ベッドに座った。入浴するにはまだ早い。後ろに倒れて枕を抱え、M・Nのことを考える、この世で最も素晴らしいことは、まだ青いココナツジュースを飲んで、それから海で放尿することではない、リオンの叔父さんはそう言っていたけれど、彼は知らない、最も素晴らしいのは、わたしの最期のペールが顔に落ちる時に、M・Nが何を言つて、何をするかを想像すること。最期のペール！とリオンなら書くだろう、彼女は書く時には崇高になる、その小説は、十二月になると街は桃の香りがするという書き出しで始まっていた。桃だって、どう思う？ 確かに十二月は桃の季節よ、周囲を果樹園の匂いで一杯にする果物を載せた荷車を街角で見かけることがある、だからといって、街全体が香りに満ちるといふ結末にするのは

崇高すぎる。リオンは生と死に関する重要な意見を持つゲバラにその物語を捧げた、すべてラテン語で。ゲバラの構想にラテン語が入るなんて。入るのかしら？ 彼がラテン語を好きならね。わたしは好きかしら？ 彼は尊い時間に地面に横たわり、手を頭の下で組んで、雲を見ながらラテン語を話す。死はラテン語と相性が良い、死ほどラテン語と相性が良いものはない。この都市は桃の香りがするということに同意するなんて常軌を逸している。いつたいどんな都市なんだ？ と彼は困りきつて訊くでしょう。第三世界？ 第三世界。桃の香りがする？ リア・ジ・メロ・シユルツの意見によると香る。そこで彼は、目であるところの目を閉じて、口であるところに微笑みを浮かべる。私はこの女弟子たちとともに準備が整っている。結局のところ、彼女の問題だわ、わたしの問題は毛深い真つ裸のM・Nのこと、わたしよりもずつと毛がある、彼はとても毛深い、猿のように。でも美しい猿、顔は滅多にないほど知的で、右目は左目よりも少しだけ小さく、悲しげで、顔の片側はもう半分よりも、果てしなく悲しそうに見える。果てしなく。果てしなく果てしなくわたしは言い続けることができるだろう。単純な言葉は神の腕のように果てしなく長く、川、山、溪谷に広がる。言葉。身ぶりは蛇の皮が古い皮の下でなめらかに突き破るように新しくなる。でもねばねばしていない。農園で蛇に触ったときに、緑色

で厚みがあったけれど、ねばねばしていなかった。M・Nの身ぶりは常に新しい、他の時とすべて同じだというのは本当ではない。細部で作られたものを作りだして、清潔な皮膚に変わる。神は細部にいるのだから、最も研ぎ澄まされた喜びも細部にある、M・N、今言ったことを聞いていた？ アナ・クララが付けまつ毛を外したときに、気が変になった恋人がいて、ビキニを外した時はそれほどでもなかったらしいけれど、まつ毛を外したとたんだって、光栄よね。裸の目。あなたがたに言っておくけれど、目の裸は陰部の裸よりも刺激的になる日がくる。陰部が淫らであると考えるのは単なる因習。じゃあ、口は？ 口は興奮して、嘔みつき、嘔み、嘔みつく。桃にかぶりつく、覚えている？ わたしを書くとしたら、『桃の男』というタイトルの物語にする。牛乳を飲みながら曲がり角を見ていた。すると、手に桃を一つ持つ平凡な男がいた。わたしはその熟れた桃を見ていた、男は目を半開きにして、その輪郭を記憶に留めたいかのように、指の間で回しながら手探りしていた。ぎこちない表情で、整った顎髭は墨で書いた線のように顔の皺を強調していた、でもそのぎこちなさは桃の香りがしたときに和らいだ。わたしはうっとりした。彼は唇で桃の皮の繊毛を撫で、指先で触れるかのように、唇で桃の表面全体を舐めた。広がった鼻孔、寄り目。わたしはすべてが一度で終わって欲しかったけれど、彼はまったく急

いでないようだった。ほとんど怒っているかのように、顎で桃をこすり、指で挟んで桃を回しながら、舌先は桃の先端を探した。見つかった？ わたしはカフエのカウンターの高い位置にいたけれど、望遠鏡で見ているかのように見ていた。彼はピンク色の桃の先端を見つけ、舌先で円を描くように、激しく、それを愛撫し始めた。舌先が桃色の先端と同じ色をしていることを見るのができたし、もはや苦しみになっていく表情をして、それを舐めるのも見るのができた。彼が桃の果汁を遠くに吐き出そうと大きな口を開けて飛び跳ねたとき、わたしは牛乳を喉に詰まらせた。思い出すとまったく不快になる、ああ、ローリーナ・ヴァス・レミ、恥ずかしくない？

「恥ずかしくない」と大きな声で、誘惑の天使が言う。わたしは素早くお香を焚く、ああ、邪悪な心。聖女になりました。わたしの包み込み、わたしに眠りをもたらずこのバラの香りのように純粹な。わたしがお香を焚くと、アストロナウタも眠気を感じる。わたしが気怠くなるようにアストロナウタも気怠くなる。気怠くなるのをアストロナウタから学んだ。気ままな猫、あなたはどこをほつつき歩いているの？ ねえ？ 怠惰と繁殖のレッスンを毎日やるけれど、同じ動作は決して繰り返さない、バレリーナはみんな猫を一匹飼うべき。ずる賢さ。それと同時に、なぜやんな態度。恥ずべきことへの軽蔑。あの計算高さ執着。わ

たしの猫は危険なほどの繊細さからできています。それとも悪魔なの？ レッソンの休憩時間は、わたしが無意識であるよりも、ずっと意識的にわたしのことを見ている、どうやったらわたしもそんな風にできるのだろうか？ わたしがまだM・Nのことを知らなかった時は、今みたいに何時間もだらだらしていることなんてなかった、ああ、なんてこと。イエス様だけが理解し赦してくださる、神だけがわたしたちのように耐え忍んだ。イエス様、イエス様、どんなにわたしはあなたを愛していることか。あなたを称えるためにレコードをかけます、お待ちください、アベルが羊を捧げたように、音楽を贈ります、羊の方が重要であることは当然です、でもイエス様はわたしが血を怖がっていて、わたしの捧げ物は音楽だけであることを理解してください。ジミ・ヘンドリックス？ お聴きください、親愛なるお方、彼が死ぬ前に作った最後の曲を聴いてください、その可哀想な人は薬物中毒で死んでしまった、彼らはみな薬物中毒で死んでしまう、でもお聴きください、汗と埃にまみれた縮れ毛まであなたが手をおろすのをわたしは知っている、親愛なる、ジミ！

ローレナはしなやかな跳躍で壁紙と同じ色をした金メッキが施された鉄製のベッドに倒れこんだ。ダンスのステップを数歩練習して、鉄の縁に裸足の足がつくまで、脚を上げて、ジュートの絨毯の青いストライプの線の上に跳躍し

て下りた。体を真つすぐにし、長い髪を後ろに振って前を見て、レコードプレーヤーのところまでストライプの線の上をバランスをとりながら進んだ。

「ジミ、ジミ、あなたはどこにいるの？」と彼女は柵に積み重なったレコードを調べながら訊いた。黄色い小さな花柄の白くて薄いパジャマを着て、金の小さなハートのついたネックレスをしている。指先でレコードを掴まんだ。「ホームロ、あなたはどこにいるの？」

潤んだ目を押さえて、レコードをターンテーブルに置いた。そつと針を上げて、目の見えない鳥の口ばしを水入れまで誘導するように導き、そつと落とす。

「ローレナ！」

声は庭から聞こえてきた。彼女は素早く長い髪の毛をかき寄せ、うなじのところまで束ねて、つま先立ちをした。腕を広げた。絨毯のジグザグ模様の線の上を、ワイヤーの上の綱渡り芸人のように緊張して歩いた。

「ローレナ、窓から顔を出して、あなたと話がしたいの！」彼女はぐらぐらと揺れながら、右足は線の上に置いて、左足は高く上げて宙に止めた。バランスを崩すことなく、左足を右足の前に置くことができたときに、緊張を弛めた。端まで到達した。深々とお辞儀をしながら、左右に体を折り、腕を弓なりにして後方に曲げ、手を半開きの羽のよう